

## 第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」⑧

元おやさと研究所長  
井上 昭夫 Akio Inoue

## 第八節 「天円地方」と飯降伊蔵の「曲尺写真」

教祖の「奈良、初瀬七里の間は家が建て続き、一里四方は宿屋で詰まる程に。」という意味の御予言(『稿本天理教教祖伝逸話篇』93)を、わたくしは「元の理」の六柱神を配置した「規矩」論から読み込み、ちばを中心とし、大和盆地全体を包摂する領域・「五里矩形」「七里一円」を都市範囲とした「天理やまとユートエコトピア」構想のデザイン化を試みたことがある。なお『稿本』引用の「奈良、初瀬七里の間は家が建て続き」は、教義及資料集成部編(昭和6年)の『おやさまのおもかげ』では「奈良、初瀬七里の間は宿屋でつまり」となっており、「八棟八商売」という表現が頻出する。いずれにしろ教祖の予言的言説は、その現代的・未来的解釈を通して、フーリエのファラステールに象徴される理想的田園都市やパウロ・ソレリによってデザインされた巨大な宇宙都市の構成要素を想起させ、天理ユートピア共同幻想に向かう想像力に強烈な刺激をあたえる。その「元の理」に基づいた構成原理の解説については、拙著『21世紀の新しき理想郷～ユートエコトピア』等を参照いただきたい。著書では当時の満州村を天理教最初のユートピア実験としてその意義を解説し、世界史における諸ユートピア建築との比較を行った。後者はウガンダにおけるヴィクトリア湖畔での土囊建築を主とした貧困緩和自立支援活動と称する、今思い出せばエイズ孤児たちとの協働による天理教学の命をかけた「事」的实践行為であった。「元の理」を母胎とした土囊エコビレッジのデザインは高知工科大学准教授の渡辺菊真氏によって設計され、『新建築』2010年3月号で紹介されたのち、米国2012年度の「ワールド アーキテクチャ コミュニティ賞」が授与されている。

わたしたちが泥土を土囊袋に詰めこみ、ドーム状にたたき上げたモデル群は、天理大学南棟校舎の一角など数か所において建築した。しかし、わたくしが大学を退職した直後に、なぜか知らぬ間に跡形もなく取り壊されていた。このモデルやインドのジャムナガールでの建築は、アフリカ開発会議(TICAD)の横浜会議や国境なき建築家集団のホームページなど関係外国語文献でも広く紹介された。ロシアのテレビ局の取材なども加えて、数年間アフガニスタンから数十名の研修生が訪れ、土囊の積み上げ訓練をし、好評を博して各種メディアも注目し記事として取り上げていた。いまやなき天理土囊ドーム・モデルの中心には、広島国連ユニタールが毎年招聘するアフガン研修生数十名とともにタイムカプセルを深く埋めておいたので、7世紀の斉明天皇の「狂心の溝」が考古学的に発掘される時がくれば、場所的に将来発見されるであろうと妄想・期待している次第である。天理砂岩を飛鳥まで運んだ『日本書紀』に見られるこの古代運河の始発点は、現在の天理市豊田町一本松の第二次世界大戦終戦直前に予科練によって掘られた昭和天皇の御座所あたりから始まると推定される(鶴井忠義『斉明天皇と狂心渠』青垣出版、2012年等々)。2015年、天理市の教育委員会によって、ようやくその指示看板が絵入りで現場近くに建てられたのは注目すべきことである。

また、わたくしは一信仰者として「ておどり」の十一下り目の第一歌の手振り―「ひのもと」が「天円」、「やかた」が「地方」を象徴している―が「規矩」そのものを的確に表現していると考えてきた。その着想に拍車をかけたのが教祖が現身を隠された翌日、旧曆明治20年1月27日に、記念撮影された一葉の記念写真に写る教祖が褒められた飯降伊蔵の丁髷が織りなす顔面頭部の「円形」と、左手に掲げる曲尺(矩的普請の意思)が発信・象徴する姿にあった。『本席飯降伊蔵の生涯一天の定規』(天理教道友社)の62頁の写真説明には「教祖現身おかくしの翌2月19日(旧曆

正月27日)の写真。中央右の伊蔵は曲尺を持っているが、これは何を意味するのだろうか」とあり、『ひながたとかぐらづとめ―国家権力の弾圧と近代法制史料』(松谷武一、道友社、1998年)の最終頁には同じ伊蔵の顔写真だけが拡大されて一ページのど真ん中に位置づけられ、前頁の文章には「大工の曲尺をしっかりとぎり

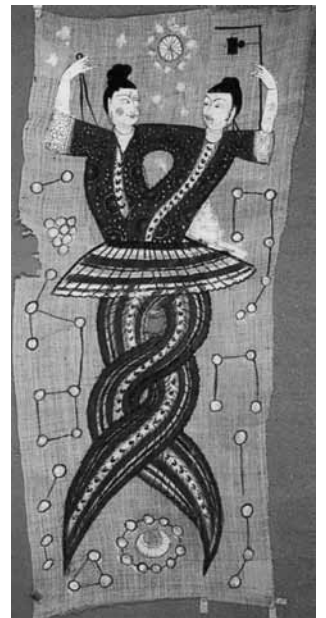


(図1)

しめた、かなしみにくれる飯降伊蔵が写っている(中略)。この日のお屋敷の悲痛な雰囲気がつたわってくる写真である。」(図1)とある。しかしわたくしは、この伊蔵の写真からは、教祖が現身をかくされた悲しみを超えた本席としての、熊楠のいう「理不思議」の真剣さが凝縮してあらわれていると見ている。つまり伊蔵の写真が発光する「こうき」的覚醒が、この写真の意味する「天円地方」であり、「規矩」の表現としてしっかりと握られた「曲尺」であったという次第である。私流の観想からは「大工」の象徴として力強く伊蔵によって握られたあの一本の定規からは、直感的に十二下りの終わりのはじめである「だいくのにもそろいきた」という「みかぐらうた」の「大苦」や「代苦」の人(任)につながる、真の「棟梁」の「これから」の「本席」としての、「仕切り根性」の「氣」が凝縮しているように見えるのであった。

「天円地方」とは陰陽道の宇宙観である。天は「円形」であり、大地は「方形」という意味である。「円形」の天空は「回転」つまり「動」をあらわしている。「方形」の大地は不動であって「静」をあらわす。つまり天円地方というのは天動説のことであった。したがって「地方」の意味は、本来「中央」に対しての

「地方(ちほう)」ではない。つまりローカルではないということである。天理教では、地場甘露台を中心に「円形」を作り舞う十人のつとめ人衆の動作を音声でリードする役割を持つ「地方(じかた)」と同じである。「地方(じかた)」の音声の間違えば、「天円」は軌道を失うのである。「地方」とは、もともと現代でいう「中央」に対する枝葉としての「地方(ちほう)」ではなく、「天円」に対応する「地方(じかた)」なのであった。つとめの第二節と「元の理」からいえば、地と天とは「いぎなみ」と「いぎなぎ」を意味している。つまりこの人頭蛇身の二神は「規矩」(コンパスと定規)に対応しているのであった。古代中国の画像に見る伏羲は、宇宙を設計する道具として円を描くコンパスを、女媧は直線や正方形を描く定規を持っている。宇宙が天円地方と呼ばれたのはそのゆえである。『古事記』に隠されている神代の主人公である「いぎなぎ」と「いぎなみ」がもっているのは、伏羲と女媧(図2)の日本版である。それは神社の鏡と剣やしめ縄、寺院の胎藏界と金剛界の曼荼羅が祈りの対象としてあったことにつながっている。この「規矩」がフリーメイソンのシンボルであることもよく知られている。



(図2)